

森の紫陽花

泉鏡花

青空文庫

千駄木の森の夏ぞ晝も暗き。此處の森敢て深しといふにはあらねど、おしまはし、周圍
 を樹林にて取巻きたれば、不動坂、團子坂、巢鴨などに縦横に通ずる蜘蛛手の路
 は、恰も黄昏に樹深き山路を辿るが如し。尤も小石川白山の上、追分のあたりよ
 り、一圓の高臺なれども、射る日の光薄ければ小雨のあとも路は乾かず。此の奥に住
 める人の使へる婢、やつちや場に青物買ひに出づるに、いつも高足駄穿きて、なほ爪
 先を汚すぬかるみの、特に水溜には、蛭も泳ぐらんと氣味悪きに、唯一重森を出づ
 れば、吹通しの風砂を捲きて、雪駄ちやらくと人の通る、此方は裾端折の然も穿
 物の泥、二の字ならぬ奥山住の足痕を、白晝に印するが極悪しなど歎つ。
 嘗て雨のふる夜、其の人の家より辭して我家に歸ることありしに、固より親いませず、
 いろと提灯は持たぬ身の、藪の前、祠のうしろ、左右畑の中を拾ひて、蛇の目の傘脊
 筋さがりに引かつぎたるほどこそよけれ、たかひくの路の、ともすれば、ぬかるみの撥ひ
 やりとして、然らぬだに我が心覺束なきを、やがて追分の方に出んとして、森の下に
 入るよとすれば呀、眞暗三寶黑白も分かず。今までは、春雨に、春雨にしよぼと
 濡れたもよいものを、夏はなほと、はらくはらくと降りかゝるを、我ながらサテ情知り

顔がほの袖そでにうけて、綽しやく々くとして餘裕よゆうありし傘からかさとともに肩かたをすぼめ、泳およぐやうなる姿すがたして、
 右手めでを探さぐれば、竹垣たけがきの濡ぬれたるが、するくと手に觸さはる。左手ゆんでを傘かさの柄えにて探さぐりながら、
 顔かほばかり前まへに出だせば、此この折をりぞ、風かぜも遮さへぎられて激はげしくは當あたらぬ空そらに、蜘蛛くもの巢すの類ほにかゝ
 るも侘わびしかりしが、然さばかり降ふるとも覺おぼえざりしに、兔とかうして樹立こたちに出いづれば、町まちの方かた
 は車軸しやちくを流ながす雨あめなりき。

蚊遣かやりの煙けむ古井戸ふるゐるのあたりを籠こむる、友ともの家いへの縁端えんばたに罷まかり來きて、地切ぢぎりの強煙草つよたばこを吹ふか
 す植木屋うゑきやは、年久としひさしく此この森もりに住すめりとて、初冬はつふゆにもなれば、汽車きしやの音おとの轟とどろく絶間たえま、風
 の吹ふきやむトタン、時雨しぐれ來くるをりくとごとに、狐狸きつねの今いまも鳴なくとぞいふなる。然さもあるべ
 し、但狸たぬきの聲こゑは、老夫をぢが耳みみに蚯蚓みづに似にたりや。

件くだんの古井戸ふるゐるは、先住せんぢうの家いへの妻つまものに狂くるふことありて其處そこに空むなしくなりぬとぞ。朽くちた
 る蓋ふた葎ひし々くとして大おほいなる石いしのおもしを置おいたり。友ともは心強こゝろにして、小夜さよの螢ほたるの光ひか明るく、
 梅うめの切株きりかぶに滑なめかなる青苔せいたいの露つゆを照てらして、衝つと消きえて、背戸せどの藪やぶにさらくとものの歩あ
 行く氣勢けしするをも恐おそれねど、我われは彼かの雨あめの夜よを惱なやみし時とき、朽木くちきの燃もゆる、はた板戸いたど洩もる遠と
 燈ほともし、畦行あぜゆく小提燈こちやうちんの影かげ一つ認みめざりしこそ幸さいはひなりけれ。思おもへば臆おく病びやうの、目めを塞ふさ
 いでや歩行あるきけん、降ふりしきる音おとは徑みちを挾さむ梢すゑにぎツとかぶさる中に、取とつて食くはうと鼻ふくろが

鳴きぬ。

恁かくは森もりのおどろ／＼しき姿すがたのみ、大方おほかたの風情ふせいはこれに越こえて、朝夕あさゆふの趣言おもむきひ知らずめでたき由よし。

曙あけぼのは知らず、黄昏たそがれに此この森もりの中なかに辿たどることありしが、幹みきに葉はに茜あかねす夕日ゆふひ三筋みすぢ四筋よすぢ、梢こずゑには羅うすものの靄もやを籠こめて、茄子なす畑ばたけの根ねは暗くらく、其その花はなも小ちひさき實みとなりつ。

柵たなして架かるとにもあらず、夕顔ゆふがほのつる西家せいかの廂ひさしを這はひ、烏からす瓜うりの花はなほの／＼と東と家の垣うかに霧かきを吐はきぬ。強しひて我句われくを求もとむるにはあらず、藪やぶには鶯うぐひすの音ねを入いる、時ときぞ。

日は茂しげれる中なかより暮くれ初そめて、小暗をくらきわたり蚊かばしら柱いへは家いへなき處ところに立たてり。袂たもとすゞしき深ふかみどりの樹蔭こかげを行ゆく身みには、あはれ小ちひさきものども打群うちむれてもの言いひかはすわと、それも風情ふぜいかな。分わけて見話みつむるばかり、現うつに見みゆるまで美うつくしきは紫陽花あぢさゐなり。其その淺葱あさぎなる、淺あさみどりなる、薄うすき濃こき紫むらさきなる、中なかには紅淡くれなゐき紅べにつけたる、額がくといふとぞ。夏なつは然さることながら此この邊あたり分わけて多おほし。明あかるきより暗くらきに入いるところところくら、暗くらきより明あかるきに出いづる處ところ、石いしに添そひ、竹たけに添そひ、籬まがきに立たち、戸とに匂たぐず、馬蘭ばらんの中なか、古井ふるゐの傍わきに、紫むらさきの佛おぼなきはあらず。寂じやくたる森もりの中なか深く、もう／＼と牛うしの聲こゑして、沼ぬまとも覺おぼしき泥どろの中なかに、埒らちもこはれ／＼牛養しやしなへる庭にはにさへ紫陽花あぢさゐの花盛はななり。

此時、白襟の衣紋正しく、濃いお納戸の單衣着て、紺地の帯胸高う、高島田の品
 よきに、銀の平打の笄のみ、唯黒髪の中に淡くかざしたるが、手車と見えたり、小
 豆色の膝かけして、屈竟なる壯佼具したるが、車の輪も緩やかに、彼の蜘蛛手の
 森の下道を、訪ふ人の家を尋ね悩みつと覺しく、此處彼處、紫陽花咲けりと見る處、必
 ず、一時ばかりの間に六度七度出であひぬ。實に我も其日はじめて訪ひ到れる友の家
 を尋ねあぐみしなりけり。

玉簾の中もれ出でたらんばかりの女の倂顔の色白きも衣の好みも、紫陽花の色に
 照榮えつ。蹴込の敷毛燃立つばかり、ひらくくと夕風に徜徉へる状よ、何處、いづこ、
 夕顔の宿やおとなふらん。

笛の音も聞えずや、あはれ此のあたりに若き詩人や住める、うつくしき學士やあると、
 折からの森の星のゆかしかりしを、今も忘れず。さればゆかしさに、敢て岡焼をせずし
 て記をつくる。

明治三十四年八月

青空文庫情報

底本：「鏡花全集 卷二十七」岩波書店

1942（昭和17）年10月20日第1刷発行

1988（昭和63）年11月2日第3刷発行

※題名の下にあった年代の注を、最後に移しました。

入力：門田裕志

校正：鈴木厚司

2003年5月18日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

森の紫陽花

泉鏡花

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>